

【千代田町下直鳥】

菱の実ふるさと会

ふるさとこの秋の味覚として親しまれてきた菱の実。ハンギーに乗って実を採取する風景は佐賀平野の風物詩になっており、昔は祭りや街頭で菱の実を売る姿も見かけられました。

近年、こうした光景は消えつつありますが、この風物詩を今も守り続けているのが「千代田町下直鳥菱の実ふるさと会」です。



今がシーズンの菱の実採り

ふるさとの風物詩残したい



後継者不足が悩みだという会員たち

「今年は、このままいけば、多く菱の実が採れそうです」と会の中心的役割を担っている執行初枝さん。

下直鳥地区では一昨年、アゾラという赤い浮き草が異常発生したため、クリークに自生していた菱が激減。収穫量も例年の1割にまで落ち込みました。

このため、坂井隆夫区長とも相談し、原因の調査や対策に乗り出しました。坂井区長は「春と夏の2回、地区でクリークの掃除をして、アゾラ除去を試みて、追いつかない。そこで市にお願いして大々的なアゾラ除去をしてもらいました。そのおかげか、今年は例年の8割まで回復しました」と、ひと安心の様子でした。

執行さんが菱の実採取を始めた50年ほど前には、婦人会が主体でした。ほ場整備が終わって、活動は婦人会から千代田町高齢者菱栽培グループに移り、約10年前には、菱の郵便販売を行ったため、名称を「千代田町下直鳥菱の実ふるさと会」に変更し、現在に至っています。

心配したクリークの菱は復活しましたが、悩みも多そうです。まず、担い手が少ないこと。婦人会が主体の当時には、30人ほどでしたが、栽培グループに移った頃には15人に。「最近、減少がさらに進んで、この3年間で5人になりました。現在は、男性の方にも手伝ってもらって8人で活動しています」と執行さん。

アゾラは除去できましたが、ジュンサイハムシという害虫も発生。菱の葉を食い、枯れさせてしまうため、駆除に悩まされているというところです。

現在、神崎市では、地元産の菱を使った焼酎を開発、ブランド化に取り組んでおり、原料となる菱の確保が課題の一つです。

執行さんは「高齢化と後継者不足で、一時は解散も考えましたが、神崎市のためになればと思いつけています。現状を考えると地区の枠を超えた取り組みが必要な時期なのかもしれません」と話されていました。

一人ひとりが生き生きと暮らす元気な神崎を。市民の立場で、住みよくなるまちづくりに取り組んでくれる団体をシリーズで紹介していきます。



収穫されたばかりの菱の実

菱の実は、9月下旬から10月中旬ごろまで採取。希望者には販売していますが、作業が行われる日曜日と木曜日の前日までに電話予約が必要です。

「千代田町下直鳥菱の実ふるさと会」

連絡先 執行 TEL 0952-44-5057

市のうごき(平成22年8月末日現在)

- 人 □ 33,472人(対前月 -36人)
(男/15,979人 女/17,493人)
- 世帯数 11,160世帯(対前月 -5世帯)